

デイエゴ・リベラに関する50の質問

加藤 薫

概要

2007年はメキシコ壁画運動の三大巨匠の一人として著名なデイエゴ・リベラの没後五十周年にあたる。また偶然にもそのデイエゴが生涯の五度の結婚のうち二回も結婚相手として選んだ女性画家フリーダ・カーロのちょうど生誕百周年とも重なる。そのせいか、海外ではこの二人の画業を中心にすえた美術展企画がいくつも進行している。この二人を比べたとき、フリーダは47歳という若さで逝去し、身体的障害の問題もあって制作活動もメキシコ国内に集中していることなどからその人生についてはエピソード的なことも含め、かなり明らかにされてきている。一方、デイエゴについてはまさにメキシコ美術の代表者格として海外にも長期滞在するなど、その七一年の生涯は実に多彩かつエネルギーに満ちたものだった。それゆえにデイエゴという人間の全貌を捉えるのはかなりの困難を伴う作業だ。

この事態をさらに複雑にしているのは、普通は一次資料扱いされる自伝の類がなく、存在するのは友人の伝記作家、ジャーナリスト、美術評論家などとのインタビューに答える形で記録された評伝のみである。対話者に対する言説はインタビュー時の政局や時代情勢を直接反映させたり、インタビュー時の制作作品を正当化するために過去の事象を巧みに都合の良いように変形させたり、また単純に忘れてしまったことでも忘れたというと何かを隠していると思われるのを嫌い、適当に話しをつなげてしまったり、対話者の資質や出版物になった時の読者の反応も先読みしての発言となり、ドキュメントとして信頼性が低いことである。こういった研究者の悩みをよそに、デイエゴについてもっと知りたいという要望は強まってきている。一番の問題は未だデイエゴに関する包括的邦文出版物がないことだ。

本稿はデイエゴの画業に関する講演会や講義などで筆者に寄せられた質問、疑問に関するメモをベースに、筆者なりに用意した回答例をある程度時系列で列記したものである。極めて個人的な備忘録ノートを転載したようなものだが、デイ

エゴの人間像を描くには不可欠な要素でもあり、Q&Aの形でまとめてみる。

Q01：デイエゴ・リベラはいつ生まれましたか？

A：デイエゴ自身は終生1886年12月8日と述べてきていましたが、教会で洗礼を受けた時に聖職者に提出した出生記録では12月13日になっています。誕生日の守護聖人名や家族の天候に関する記憶などの傍証からも最近では12月13日説が有力になってきています。

Q02：デイエゴ・リベラの生まれた場所はどこでしたか？

A：グアナフアト州の州都グアナフアト市ポシート通り87番地の自宅でした。グアナフアト市は植民地時代は銀山を経済基盤とした鉱山都市で、首都メキシコ市からは自動車ですら約4時間弱の距離にあります。グアナフアト市は、銀山を幾つも保有し市の政治経済を牛耳る少数の超大金持ちと、銀山で肉体労働に従事する多数の貧困労働者と極端な二極構造で、リベラ家のような中産階級は少なかったのですが、その中産階級の住む典型的な都市内の山の中腹の居住区にあります。石造三階建ての家で、馬で引く馬車を所有するほどの生活でした。また住み込みの女性お手伝いさんもいました。

Q03：デイエゴ・リベラの出生時、父親は何をしていましたか？

A：教育者でした。スペイン語の教師でしたが、同時に日本で言う教育委員会委員でもあり、州政府の要請で主に地方農村部の初等教育プログラム充実のための出張が多かったようです。馬でなければいけない所も多く、数週間も不在になる場合も多かったようです。デイエゴが生まれた頃は他に市会議員や地元新聞の編集委員も兼務していました。

Q04：デイエゴ・リベラの父方は教育者の家系だったのですか？

A：いいえ、違います。父親の父親、すなわちデイエゴの祖父はロシア生まれのスペイン育ちでスペイン軍隊で功績を挙げた後に引退しました。その後キューバで貿易業を営んだのち、さらなる冒険を求めてメキシコにやってきた人です。祖父の父親、つまり曾祖父はイタリア出身の軍人でスペイン宮廷に雇われた軍

人でした。外交武官としてロシア赴任中に祖父が生まれたというわけです。祖父はグアナフアトで銀山開発に投資し、最盛期は11もの銀鉱を所有していました。しかしデイエゴの父親の代には鉱脈の枯渇や経営能力の不足から全てを手放し、やむなく教育分野に転進したものです。

Q05：デイエゴ・リベラの母親はどのような人だったのですか？

A：母親の母親、即ちデイエゴ・リベラの祖母ネメツア・ロドリゲス・デ・バリエントスはメスティーサ（白人とインディオの混血）で、スペイン出身の電気技師ファン・バリエントス・エルナンデスと結婚しました。ファンはグアナフアトに来てからは電気を扱う鉱山機器や照明機器の設置、操作、運営などの仕事を幅広く営んでいました。裕福だったのでデイエゴの母親マリアやマリアの姉のカサレアは一度も学校に行くことなく、自宅で複数の家庭教師から教育を受けました。しかし父親の死後は生活が苦しくなり、母親は一時は日用雑貨を売る店を営むほどでしたが、やがてグアナフアト市内で私立学校を創立し、この学校で娘マリアは音楽クラスを、姉カサレアは刺繍や織物クラスを担当しました。当時としては珍しい知識や知性を資産に働く女性でした。ちなみにデイエゴ・リベラの父親がこの学校にスペイン語教師として採用されたことがマリアとの出会いの始まりでした。

Q06：デイエゴ・リベラに兄弟姉妹はいましたか？

A：いました。デイエゴには同時に生まれた双子のカルロスがいましたが2歳の時に死亡しています。その後2回ほど母親は流産しましたが、デイエゴが6歳の時に妹マリアが生まれ、こちらは無事に育っています。メキシコ市に移ってから後のデイエゴが9歳の時にも母親マリアは次男になるはずだった男の子アルフォンソを産みましたが、この子も生後一週間で亡くなりました。

Q07：デイエゴ・リベラの美術の才能は誰から受け継いだものですか？

A：父方、母方の系譜を見る限り、芸術方面で才能を発揮した人物は見当たりません。性格的には父方の祖父に似た押しが強さを発揮したようです。デイエゴの幼児期のあだ名は「インヘニエロ（技師）」で、科学技術の産物である採掘機

械や汽車への憧憬、動植物への興味や合理的な思考への傾倒は、土木工学の学位を持っていた父親の影響と考えられています。母親は音楽教師でしたが、デイエゴの画業と音楽がリンクしたような記述は見当たりませんし、デイエゴは何の楽器演奏もできず、歌も下手でした。

Q08：軍人になりたいとは思わなかったのですか？

A：思いました。19世紀末の一般的な風潮として、将来大きくなったら何になりたいかと問われれば、男の子ならばまず軍人と答えるという憧れの職業でしたから当然だと思います。デイエゴが伝記作家に語った内容と客観的なデータが一致しないのですが、おそらく11歳の誕生日直後に父親の薦めもあって陸軍幼年学校に1年弱ほど在籍しました。しかし身体の大きさに比べて足腰が弱く、扁平足で通常の訓練でも歩くとすぐ疲れてしまい、しかも教官からの命令にも納得するまで質問を繰り返してけむたらがれるなど、この職業にむかないことを察したようです。そもそものきっかけは、デイエゴが遊びで紙に模擬戦俯瞰図を描いた所、父親が友人である戦争担当大臣ペドロ・イノソホ將軍に披露し、軍師としての才能があると賞賛されたことから始まった話で、デイエゴの描写能力の高さを軍事能力の高さと勘違いしたことによります。いずれにせよこの幼年兵学校時代の屈辱的な経験がデイエゴの劣等感にもつながり、反動で、メキシコ革命の動乱期にはエミリアーノ・サパタというラディカルな農地改革の主張を貫徹して戦い続けた革命軍に参加し、共に戦ったというような神話を構築しました。また護身用にリボルバー銃を常に携行してましたが、しばしば議論の相手を暴力的に抑制する手段としても使いました。

Q09：身体の特徴としてはどんな点が挙げられますか？

A：1907年に初めてヨーロッパ留学を果たした時の身長は185センチ、体重は140キロという巨躯でした。マドリッド、パリの極貧生活時は体重も100キロ前後にまで減ったようでしたが、すでに糖尿病の症候が出てきており、最初の妻アンヘリカ・ベロフは野菜と果物中心の食事メニューを常に用意しました。でも毎晩のように出かけた友人たちとの会合や団欒ではワインとチーズ、パイプ煙草が当たり前のように並んでいましたから、節制はかなり難

しかったようです。モンパルナスの画家・文化人のたまり場として有名なカフェ・レトンドの仲間内からは、デイエゴはその荒々しい態度と常につば広の帽子をかぶっていたことから英語で「メキシカン・カウボーイ」と呼ばれていました。メキシコに戻り二度目の結婚相手となったガダルーペ・マリンの最初の出会いのときの三六歳のデイエゴの印象は「醜い中年男」というものでしたし、三度目の結婚相手となった二一歳年下のフリーダ・カーロからは「ヒキガエルのような男」とも呼ばれていましたから、決して美男というわけではないようでした。デイエゴはしかし大きな蛙という自己イメージが以外と気にいっていたようです。というのも生地グアナフアトの語源は先住民語で「蛙の多く住む山」という意味で、蛙は雨と水の土着神の化身とみなされていました。だからその蛙の中でもひときわ大きく眼がぎょろぎょろした「ヒキガエル」と呼ばれたことは賞賛だと解釈したのです。妻がいるという立場に関係なくデイエゴの女性遍歴は実に多彩なものがありましたから、精力はかなりあったものと判断できます。

Q10：生涯に五度も結婚すること自体驚きですが、さらに結婚相手を傷つけても女性遍歴を続けてきたのには何か理由があったのですか？

A：真相はわかりません。デイエゴ自身も具体的に述べたことはありません。妻フリーダ・カーロへの言い訳として有名な言葉に、出会った女性とのつかの間の性的関係は、たまたまそこにあった公衆便所で排泄行為をするようなものだ、といった趣旨の発言がありますが、どこまで本音だったのかはわかりません。社会心理学的見地から、常にマッチョであることを強迫観念として持つメキシコ人男性特有の行動パターンだと分析している研究書もありますが、全てのメキシコ人男性が機会さえあればデイエゴと同様の行動をとるかといえばそんなことはありませんし、他の文化環境に育った男性でもデイエゴ以上に異なる女性を求め続けた男性はいます。

年齢的には二十代後半から四十代前半までがデイエゴの女性関係が一番多彩な時期でしたが、同時にその上昇する一方の名声に反して経済的には一番苦しい時期でもありました。壁画を描く一方では寝る時間も惜しんで小さな油絵、水彩画、素描などを描き、観光客などにまで売っていたこともあります。性的

関係はデイエゴにとっては何らかの支援を与えてくれた女性や作品を購入してくれた女性へのちょっとした御礼とかサービスと考えていたのではないのでしょうか。現代ならば女性の所有欲を満足させるホストと同じ割り切った心境だったのではないかと推察しています。

Q11：美術の道を進むと決めたきっかけは何で、それはいつのことだったのですか？

A：残存するデイエゴの最初の作品だとされているのは、まだグアナフアトにいた3歳の時に、大好きな蒸気機関車を紙に鉛筆で描いた素描作品です。対称の客観的な把握という面ですでに秀逸なものを持っていたことを裏づける貴重な作品です。父親は教師でしたから、美術は専門でなかったにせよ、鉛筆やクレヨンなどの使い方の初歩を教えることはできたようで、デイエゴもそのことでは伝記作家を通じて父親に感謝の気持ちを述べています。父親は約10坪ほどあった子供部屋の三方に黒板を置いて、字でも絵でも好きなだけ描ける環境を与えていました。また父も母も絵本を見せ、読んできかせるような習慣があったようです。しかし幼児期に美術の道にすすむことは夢にも考えたことはなく、将来の夢はまず軍人、次に漠然と動物に囲まれて生きるような生活でした。美術人生を意識したのは陸軍幼年学校の生活から逃れたい気持ちに駆られた時でした。父親への初めての反抗で、父親の知識や経験、影響力の全く及ばない世界に居場所をみつけないという反抗期特有の発想でした。1898年に普通の初等教育課程を終えると国立サンカルロス美術学校夜間コースに進学しました。通常は16歳以上にならないと入学許可にならないコースでしたが、それまでに描いた素描作品（現在2点ばかり残っている）の実績とやはり両親の縁故関係で可能となったようです。翌年1899年に正規の昼間コースに転入しました。

Q12：サン・カルロス美術学校とはどんな学校だったのですか？

A：通称アカデミアと呼ばれてきた美術専門教育期間で、まだ植民地時代だった1784年にスペイン王室で承認された後、派遣教師の選考がおこなわれ、初代校長には彫金作家アントニオ・ヘロニモ・ヒルがえらばれ1785年に赴任

しました。何故彫金かというと、当時はまだ通貨が金属貨幣全盛の時代で、経済成長著しいメキシコ（当時はまだヌエバ・エスパーニャ副王領）では様々な単位のコイン造幣とその管理が政府として重要な仕事でした。だからそのコインのデザインもとても重要だったのです。

カリキュラムとしては実技では彫刻、絵画、建築、版画などがあり、理論部門としては解剖学、透視画法、色彩学、美術史（聖書や西洋神話の図像学）などがありましたが、教師不足で常に全ての科目が同時開講されていたわけではありません。基礎科目としては素描クラスがありました。アカデミア設立の趣旨は、美術を通じてラテンアメリカのスペイン植民地をより徹底して西欧への同化を促すもので、ギリシャ、ローマ、そしてルネッサンス美術が唯一正統な規範とする新古典主義を教えるものです。但し、デイエゴが入学した19世紀末にはその教育内容も時代の変化に対応してかなり変化しており、反一アカデミズムの潮流である西欧モダニズム美術の手法も教育内容には盛り込んでいましたし、思想的にもメキシコ独立後の国家建設に不可欠な学術振興機関のひとつという位置づけに変質していました。また純粋な西洋文化の継承者とはみなされていなかったメキシコ生まれのアーティストがアカデミアの教師に採用される例も増加していました。それでも、好むと好まざるにかかわらず、西洋文化の最新情報を入手できる唯一の美術教育機関だったのです。

では誰が入学したかというと、上昇志向の強かった都市部の中産階級の子供たちでした。政治権力と経済力を一手に握る少数の上流階級に近づくには、彼らにない特異な才能を特異な分野で示すのが近道だったからです。リベラー一家は当時の基準で言えば典型的な中産階級で、その生活水準を維持できるのも一代限りのものでしたから、親も子供の教育には熱心でした。美術を通じて上流階級の仲間入り出来たら理想的だし、そこまで行かなくとも生活に困らない程度の技術と知識を身につけてほしいというのが一般的な中産階級の親の願いでした。上流階級の人たちは娘の教養教育の場として利用しましたが、その人数は限られ、また真のプロを志向するような女性はほとんどいませんでした。

Q13：デイエゴに影響を与えたサンカルロス美術学校の教師にはどのような人がいましたか？

A：最初の素描クラスで担当だったのはサンチアゴ・レブルでした。メキシコ人でしたがローマのアカデミア・ディ・サン・ルカで七年間も絵画を学んできた画家で、メキシコ帰国後は新古典主義風の肖像画家として名声を獲得していました。若かったデイエゴには個人的にもレブルの理解した西欧美術の真髓について、また美術の社会的役割などについて指導してきました。黄金分割技法など単に技法のひとつとしてでなく、西欧的合理主義の中に潜む神秘主義や不可知主義の事例として教えるなど技術指導以上に精神的な影響があった人物でした。

反面教師という意味では、レブルの死後に赴任してきたスペイン人のアントニオ・ファブレス・コスタにも影響を受けました。ピレット・メソッドと呼ばれた野外の外光の下での素描や作品写真からの模写など科学的な「客観性」という近代の神話に合致する教育手法を導入しましたが、同時に西欧美術の絶対優位という立場を譲らず、デイエゴは大いに嫌いました。風景画クラスではフェリックス・パルラとホセ・マリア・ベラスコの二人でした。特にベラスコからは徹底した透視画法の指導を受けました。同時にデイエゴは左右に地平線が無限に広がるような広大な風景を描く能力に欠けていることも理解したのもベラスコの作品からです。だからデイエゴの学生時代の風景画には上から俯瞰したり下から見上げたものが多いという特色があります。

デイエゴより十一歳年上でサンカルロス美術学校の先輩卒業生であり、五年間のヨーロッパ留学の後に母校の教師となったヘラルド・ムリリオからは当時の西欧のモダニズム美術の様々な情報や技法について学びました。ファブレス・コスタを除いてデイエゴが学んだ教師は全てメキシコ出身者です。これら教師にはある共通の使命感がありました。それは「メヒカニダー」（メキシコのなもの）、即ちメキシコ人でなければ表現できないような独創性のあるものの追求でした。そしてデイエゴもまた1920年代からそのメヒカニダーの追求の道にたどりつくのです。

Q14：アカデミアの美術教師以外にデイエゴに影響を与えた美術作家はいますか？

A：デイエゴ自身はメキシコのグラフィック・アートの第一人者ホセ・ガダルベ・ポサダの名前を挙げています。しかし1928年以前にデイエゴがインタビューや回顧録などでポサダの名前を具体的に挙げた文献はありません。つまり、デイエゴがある程度の名声と地位を獲得した後、自らの過去を神話化するプロセスでポサダを取り込んだのが事実だとする研究者もいます。デイエゴはポサダとの最初の出会いの場面をかなり克明に語っていますが、これも幾つかのバージョンがあり、真相はまだ謎です。但し、メキシコ市内のデイエゴの自宅とサンカルロス美術学校、生前のポサダの働いていた工房は距離的にはどれも数ブロックしか離れておらず、歩いていける距離にありましたから会おうと思えば会うことも可能でした。1935年以降の壁画にはポサダの多用したモチーフの引用やポサダ自身をモデルに使ったものも登場しますから少なくともメキシコに戻って壁画運動を興した後に多大な影響を受けたことは確かです。

美術以外となると、デイエゴは19歳の時から「サビア・モデルナ」という評論雑誌を中心としたモダニズムやカウンターカルチャーに興味のある若い文芸作家や詩人、演劇志望者、音楽家などと交流し、この雑誌の表紙をデザインしたこともあります。このグループの何人かの詩人、文芸作家とはパリ留学時代にも交流が続きました。またこの「サビア・モデルナ」の交流の輪から、後に文部大臣となり壁画運動の推進者となるホセ・バスコンセロスとも知り合いました。バスコンセロスは弁護士業を営む傍ら、青年文芸協会（アテネオ・デ・ラ・フベントウ）という組織に属し、当時の政治体制を批判する過激な言論活動を展開していました。

(続く)